



# 柳島小だより

令和4年 1月31日  
茅ヶ崎市立柳島小学校  
校長 大野 洋

## 季節のかわりめに

早いもので明日から2月、寒さはこれからが本番というところですが、暦の上では2月4日は「立春」で春の始まりです。春の到来が待ち遠しいこの頃です。

その「立春」の前日は季節の分かれ目ということで「節分」です。この節分の日には豆まきをして鬼を払う伝統的な行事として、実際に豆をまくご家庭もあるのではないのでしょうか。季節のかわりめには体調を崩しやすく、ちょっとした病気から重い病気につながってしまうことを恐れ、無病息災を願って始まった行事だったのかもしれないね。



季節の変わり目ということでは、そろそろ花粉症に悩まされる季節も始まります。鼻づまりや咳など想像しただけでも不快になりますし、コロナ禍では一層不安が増してきます。風邪と症状が似ている場合もありますが、花粉症は原因がはっきりすれば予防や治療ができるので、もし花粉症の心配があるようであれば早めの対策を立てていくようにしましょう。

一方、新型コロナウイルス感染拡大による「まん延防止等重点措置」が適用され、感染状況はいまだ収束に向かう様子が見えません。早く収束へ向かう変わり目が来てほしいものです。学校では、感染防止対策を引き続き行い、これまで以上の緊張感をもって教育活動に臨んでまいります。

## 「やまなし」から学ぶこと

6年生の国語の教科書に長年、宮沢賢治の作品「やまなし」と副教材として伝記「イーハトーブの夢」が載っています。とても難解な文章で6年生の担任となったときは、目の前の子供達とどのように読み解いていくかと挑戦する気持ちで学習に向かう教材です。

その賢治は、唯一の理解者であった妹トシがスペイン風邪にかかり病院の伝染室に隔離されていた時に、上京して毎日面倒を見たそうです。その時発熱で食欲のないトシのためにアイスクリームを差し入れ、快方へとみちびいたそうです。数年後、別の病でトシを亡くした賢治の作品は、その悲しみに大きく影響されているといわれています。「やまなし」にも表では穏やかで平和に見える世界でも、水中では食物連鎖に繋がるような命のやり取りが行われている様子が描かれています。カニの兄弟は、その一端を知り恐れますが、「やまなし」の登場とともに生きることへの希望を感じる様子が表されています。

先のスペイン風邪は、今でいうインフルエンザで、突然変異で人に感染し日本でも38万もの人がなくなり終息まで3年かかったと言われていています。100年前の話ですが、当時の人たちも経験のない病で対応に苦しんだそうです。そういう意味では、今と状況が似ています。

「やまなし」のように先への希望を持ち、命を大切に。そんな賢治の思いが、最高学年の国語の教科書に載り続ける理由なのかも知れません。